

「実践的コミュニケーション能力」考 —ソーシャルスキルとの関連を中心に—

山崎 友子

英語科教育に、「実践的コミュニケーション能力」の育成が要請されている。いったいどのような能力であろうか。本稿では、3つのエピソードをもとに、「実践的コミュニケーション能力」とは何か、そしてその指導のあり方の一つを「ソーシャルスキル」をヒントに考えてみることにする。

1. 3つのエピソードから

エピソード1

4月桜の季節に、某有名国立大学を訪れた。新入生を迎えて、大学のキャンパスは華やいだ雰囲気である。楽しみに談笑している学生の一人に、目当ての研究室の場所を聞くと、学生はある方向を指で差した。学生は私に何も言わないが、その方向に私の目指す研究室はあるのだと解釈し、礼を述べてそちらに行くと確かにその目当ての研究室にたどり着いた。この間、学生は一言も発しなかった。

エピソード2

裕子は英語が大好きだ。学校で英語をしっかりと勉強し、英会話学校にも通い、ついに、留学生試験に合格し、米国であこがれの留学を始めることになった。大学の寮では、米国人の学友と夕食のテーブルを囲む。にこやかに自己紹介をすると、まるで米国人みたい、英語が上手ね、と言われ、裕子は自分の英語力やこれからの生活に大いに自信を持った。しかし、1週間後、夕食時米国人の学生は相変わらず楽しそうに話しているが、裕子は会話に加われない。2週間後、夕食を部屋でとるようになった。一カ月後、部屋に閉じこもり講義にもでなくなり、日本の家族が心配するところとなった。

エピソード3

芳男は熱心な英語の教師である。米国で勉強する機会を得、日本へのメールも英語で書き、「英語漬け」の生活を楽しんでいる。芳男から日本の英語教師花子に「依頼」のメールが英語で届いた。直截的な依頼に不快感を覚えた花子は、デリケートな話題は日本人同士なら日本語が無難であると伝えるが、芳男は英語の方が自分の気持ちを率直に伝えることができると言う。英語で近況報告を受けたもう一人の英語教師ジャックは、英語を第1言語としているが、芳男の英語力は留学前の方がよ

かった、と言う。

これらのエピソードは、どれもコミュニケーションに成功しているとは言えない例である。何が欠けていたのであろうか。それを考察することによって、コミュニケーションを成立させる「実践的コミュニケーション能力」とは何かという問いに対する答えに近づいてみたい。

2. コミュニケーション・ブレイクダウン

エピソード1で、道を尋ねた私は目的地にたどり着くという目的を達成できているので、ある意味ではコミュニケーション・ブレイクダウンは生じていない。しかし、学生は「言語」を使用していない。しかも、学生はそのことを問題視していないのだが、私は「妙な学生」であると判断した。双方の判断にずれがあるという点では、確かにコミュニケーション・ブレイクダウンが生じている。

「あごで使う」は、「高慢な態度で人を使う」という意味である。言語を用いないコミュニケーションは一般に無礼なのである。指差すだけで言語を用いず道を示す行為が、「無礼」ととられることを学生は知らないのだろうか。あるいは、無視しているのだろうか。道を尋ねる場面の前後で、学生が友人と談笑しているところを見ると、学生は日本語の語彙・音声・文法を知っている。この学生が知らない、あるいは使っていないのは、言語を用いないコミュニケーションは一般に無礼である、言語化すべきところでは言語化すべきである、という「社会規範」である。このエピソードから、コミュニケーションが道具的な情報の交換だけではないこと、コミュニケーションには「社会規範」がそのルールの一部として含まれていることがわかる。

エピソード2で、裕子を極めて深刻な事態に陥らせたのは何であらうか。彼女の英語の発音は、米国人から英語ネイティブのように見事であると誉められている。その証拠に、1週間目は学友と英語で談笑している。だから、語彙・音声・文法に問題があるとは思えない。2週間後、彼女は自室で夕食をとるようになった。裕子が一方的にコミュニケーションを回避しているので、このコミュニケーション・ブレイクダウンには相手がいらないが、深刻なコミュニケーション・ブレイクダウンである。

米国の大学寮の食堂は社交場である。食事をしながら楽しい話題を提供し、それにあいづちをうったりして応え、会話を共有する場であり、大変にぎやかである。裕子はこのさまざまな人を相手とし、適切な話題を提供する「社交」についていけなかったのではないだろうか。そして、社交を苦手とする自分に気づき、自信を喪

失し、精神的に打撃を受けてしまったのではないかと考えられる。このエピソードから、コミュニケーションには、言語そのものに対する能力というより、言語を使用する場における「社会性」「社交能力」が必要なことがわかる。

エピソード3の芳男は饒舌である。エピソード1の学生とは違って、言語化することを楽しんでいる。また、エピソード2の裕子とも違って、メンタルな面での問題もなく、英語を使うことを心地よくさえ思っている。芳男自身は何も問題を感じていない。しかし、彼が問題を感じていないことが、コミュニケーション・ブレイクダウンそのものなのである。コミュニケーションの相手の花子は問題を感じ、双方の認識にギャップが生まれている。かつ、芳男の英語力が落ちていくという。このことは、言語そのものに内在するある要素に芳男が熟達していない、あるいは、その存在に気づいていないということが考えられる。

花子のいう「デリケートな話題」の「デリケート」とは何であろうか。社会学者の Goffman は、人の社会的な行為を“face work”という枠組みで説明した。人には、公的自我を表す face がある。その face を脅かささないような配慮を言語にこめる。これを Brown & Levinson(1987)は「ポライトネス」と呼ぶ。相手との関係やコンテキストによって、言語には命題だけでなく、心的態度などその他の情報が加えられる。その他の情報の一つである「ポライトネス」は、命題をくるみ発話者と伝達相手の face を保護するもので、菓子にまぶされる砂糖のようなものである。

芳男が、「英語の方が自分の気持ちを率直に表現できる」と言うのは、砂糖をまぶさない表現の方が「率直である」との考えに基づいている。しかし、人の相互行為は一方通行ではない。Goffman の指摘した公的自我を脅かささないことが通常の言語行為では前提とされているので、添えるべきものを添えないと、自分の意図しない印象（心的態度）が相手に伝達されてしまう。第2言語の場合、この間違いに気づきにくく、知らないうちに、コミュニケーション・ブレイクダウンが生じる。心的態度や意図の伝達に関わる語用論上の行き違いを、Jenny Thomas (1982) は“Pragmatic Failure”と呼び、統語上の間違いと異なり、人格に対する誤解を伴うコミュニケーション・ブレイクダウンを引き起こすと述べた。芳男と花子の間に生じたコミュニケーション・ブレイクダウンは、まさに Thomas のいう“Pragmatic Failure”である。花子は依頼のメールを文法的に英語がおかしいと考えたのではなく、「不快」であると感じている。そして、さらに危険なことに、芳男は Pragmatic Failure が起こっていることに気づいていない。

ポライトネスなどの方略は、言語そのものの中に組みこまれ、語用論上の道具として使用される。Pragmatic Failure に気づかない芳男は、第2言語である英語力のうち語用論的能力 (Pragmatic Competence) が不十分であると考えられる。この分野の

言語使用能力に無頓着であれば、ジャックが述べたように語学力全体の低下も起こり得るかもしれない。

エピソード3から、言語能力の中には、語彙・音声・文法以外に語用論という分野があり、この分野の知識・能力がコミュニケーションに欠けると、人格に対する誤解を引き起こして、人間関係に影響を及ぼすということがわかる。

3つのエピソードにおけるコミュニケーション・ブレイクダウンから、コミュニケーションが命題のやり取りだけではないことは明らかである。発話者の意図や心的態度をも伝達され、聞き手との間に関係が構成されていく。コミュニケーションを成立させるには、言語の文法構造に対する知識だけでなく、その言語社会の規範や、言語化する場での振舞い（社交性・社会性）の熟達も必要であり、その場にあった言語使用を選択する語用論的知識も欠かせないことがわかる。

ここで新たに付け加えたコミュニケーションを成立させるものは、伝統的な文法力・語彙力を中心とした「英語力」の範疇には入っていない。言語化することの大切さは、学習指導要領(1998)においては、「積極的な態度」として取り上げられた。しかし、現場では「英語力」とは一線を引いて考えられ、その評価の困難さが関心を集めている。「社交性」は、英語の授業の中で「教える」ものではないと言う人は多いであろう。しかし、コミュニケーションは他者との相互交流を成立させなければ成り立たない。社交性のない英語力は、電池の切れたテープレコーダーのようなものであろう。語用論的知識はなくても命題は伝達できる。もし、命題の伝達だけが問われるのであれば、語用論的知識は不用である。しかし、命題の伝達だけを目的とする場面は現実には少ない。

これら従来の「英語力」では捉えられなかったがコミュニケーションの成立に欠かせない要素を含むものが、「実践的コミュニケーション能力」であると考えられる。

3. コミュニケーション能力と実践的コミュニケーション能力

「コミュニケーション能力」を表す英語の“Communicative Competence (CC)”という用語は、社会言語学者である Dell Hymes (1972)が最初に用いたと言われている。日本語で「能力」と言うので広範な意味を持ち、英語の“Intelligence”にあたることが多いが、言語学で使用される「能力」にあたる英語の“Competence”は、より限定的な意味で用いられる。生成文法理論では、CompetenceはPerformanceと対比して論じられ、前者は人間の頭の中に内在する「言語能力」で、何が正しい文で何が非文であるかを判断する「能力」である。この能力が備わっているために、私達は「私は雪が好きくない」または“I doesn't like snow.”のような文を非文と判断できる。し

かし、このような「言語能力」はそのまま実際の発話となるとはかぎらず、何かか欠けたり変わったりすることもある。そこで、生成文法理論では、実際の「言語運用」を“Performance”として区別している。

生成文法理論による人に内在する「言語能力」の指摘は、それまでの経験主義的な研究方法をとっていた言語学にとって大きな衝撃を与えた。人として生まれると、誰もがことばを使用するようになる。それまで聞いたこともないことばを理解し、それまで使ったことのないことばを創り出すことができる。内在する「言語能力」という説明は、この不思議を解くものに思えた。しかし、現実の言語使用は複雑である。言語能力だけでなく一般常識・記憶など諸々の要因が関与しており、言語を文脈から切り離すことはできない。George Lakoff (1987) らの主唱する認知言語学は、生成文法理論のいう内在する「言語能力」は存在しないという立場をとる。

実際の言語使用の場面を考えてみよう。筆記具を持たずに授業に臨んでしまった学生は、隣の席の学生に“Do you have a pen?” と言えば、“Could you lend me a pen?” の意味で解釈してもらえることを知っている。“Do you have a pen?” に対して “Yes, I do.” と答えるだけで完結するとするやりとりは、語学教室で頻繁に観察されるが、現実の言語使用場面ではほとんどない。言語の使用は、まさに社会的な関わりをもった行為（発話行為）であり、言語形式の中だけにその意味・機能が存在するわけではない。授業中ノートをとらない学生に対して、“Do you have a pen?” と教師が言えば、ノートをとりなさいという「催促」であり、文具店で店員に対して使うと、鉛筆購入の「注文」である。人はこのような発話行為を行う「能力」を持っている。言語外にある状況は、言語そのものには埋め込まれておらず、その時々で変化するが、人には言語外の状況と言語の形式を結びつけて機能を特定することができる。生成文法の「言語能力」は、このような能力を扱っていない。

実際の言語使用を研究した社会言語学者の Dell Hymes (1972) は生成文法の「言語能力 (Competence)」に対して「コミュニケーション能力 (Communicative Competence)」という用語を提唱し、言語についての知識だけでなく言語の社会的・機能的働きの両方を身につけることがコミュニケーションを成功させるには必要であると考へた。彼の定義によると、CCは「言語学的に正確でありかつ社会言語学的に適切な言語使用ができる」ことである。この定義に従うと、エピソード 1~3 で欠けていたのは、「社会言語学的に適切な言語使用能力」ということになる。

しかし、「社交性」も「社会言語学的に適切な言語使用能力」含められるのだろうか。ロスター他 (1988) は『英語のソーシャルスキル』を著し、13の場面でのコミュニケーションの円滑な行い方を解説している。その中で、たとえば、人を紹介するときの表現には、“May I introduce you to ...” “Phillip, this is David.” などの、フォ

一マリテイが異なる表現があり、その場面に適切な表現を選択しなければならないという。さらに、このような適切な言語の選択以外に、紹介すること自体が英語社会では必須の文化的規範であることを知らなければならないという。たまたまその場にいるだけという人を日本では紹介しなくてもよいが、英語社会では、その場にいる限り紹介しなければならない。紹介しないとのけ者にしたことになるという。この判断も円滑なコミュニケーションに必要不可欠である。つまり、パーソナリティとしての「社交性」ではなく、言語使用のスキルとしての「社交性＝ソーシャルスキル」が重要な要素である。

エピソード2で登場した米国の大学寮で談笑する米国人学生達は、皆その性格が「社交的」とあるというわけではない。「社交」を必要とする場では、話題を提供し、相手の話題に楽しげに答えるという規範とそれを実現する「ソーシャルスキル」を身につけているのである。このスキルは家庭・学校・社会で訓練されてきたもので、もともと備わっていたわけではない。このソーシャルスキルを含めたものを、「実践的コミュニケーション能力」と呼ぶことが適当であろう。

4. スキルの育成と真正なコミュニケーション

「能力 (Competence)」とは抽象的概念である。その能力を発揮し、発話として実現するには具体的な「スキル (skill)」を磨く必要がある。さらに、「実践的コミュニケーション能力」を目標とすると、Speaking/Listening/Reading/Writing の4つの language skills にソーシャルスキルも付け加えなければならない。4つの language skills の指導方法については、すでに多くの研究・実践がなされている。ソーシャルスキルについては、その取り扱いも「教える」のではなく「育てる」と考えてはどうだろう。スキルは知識ではなく、行為を成立させる技能であるので、使ってみなければならない。スキルを使用する機会が与えられると、学習者はスキルを発揮せざるをえない。試行錯誤的に使用するなかで、スキルは育っていくと考えられる。もちろん、教える側には、いかにスキルを質の高いものに磨くことのできる場面を与えるかを工夫しなければならない。

エピソード2の裕子さんのケースでは、ある英語好きな学生の自己紹介を思い出した。熱心に英語を勉強している彼は、教科書をほとんど暗誦している。ある課に登場するオーストラリア人の高校生について質問すると、とうとうと英語で説明ができる。しかし、「あなた」のことを話してくださいと言うと、まごまごするばかりであった。

せっかくの「勉強」が実際の言語使用に転移しない典型的な例である。英語の勉強それ自体を目的としていると転移が困難になる。裕子さんの勉強も留学試験に合

格すること自体を目的とした勉強となつてはいなかっただろうか。彼女は、英語で自分のことを語りたい、相手のことを知りたいと思うことがあっただろうか。「実践的コミュニケーション能力」を育成するには、ソーシャルスキルまでも必要とする場面を提供する必要がある。学習者が自分のことを語る、相手のことを知ろうとする場面を作る必要がある。

かつ、その場면을真正な (authentic) コミュニケーションを目的とする場面とすれば、学習者はさまざまなスキルを発揮することが求められる。と同時に、コミュニケーションを構成するさまざまな要素が含まれているため、学習者にとって手がかりとなり、おのずとスキルが磨かれていく可能性がある。教室の中に真正なコミュニケーションの場面を作ることは不可能ではない。例えば、次のAとB二つの教室内の発話交替を見てみよう。

<A>

1. Teacher: This is a pen. Say it together.

2. Class: This is a pen.

3. Teacher: This is called a pen in English. --- What is this? Say it together in English.

4. Class: It's a pen.

<A>は語学教室の中で行われる反復練習である。2は1の鸚鵡返しで、1と2の関係は、「指示—服従」であり、2の文の持つ命題の伝達は問題とされていない。これに対し、はやはり語学教室の中でのやりとりではあるが、4は3の鸚鵡返しではない。“What is this?”への応答4は、3の“This is called a pen.”そのままではなく、“It's a pen.”と変換され、3と4は隣接応答ペアとなつて、「確認—応答」として命題の意味内容を伝達する意図をもったコミュニケーションを構成している。

“This is called a pen in English.”は教室で教師が生徒に目標言語である物を何というか教えるという真正なコミュニケーションである。それがペンであることがわからないのではなく、「英語でそれを何というかわからない」から意味のある発話となる。そうすると、応答も真正な応答が返ってきている。そして、このやりとりは、教室の外でのコミュニケーションの場面でも使用することが可能である。これに対して、繰り返して自体を目的とする<A>の応答は、真正なコミュニケーションの場面では、ほとんど使用されないものである。また、音声面でも、<A>とでは違いが見られるだろう。<A>は統率のとれた教室では、元気のいい大きな声になり、教

師はそれをよしとする。しかし、真正さという点では不自然であり、大きな声で繰り返したことが、「実践的コミュニケーション能力」として身につけ、実際の言語使用の場面に転移されるという保証はない。

5. おわりに

Bialystok & Hakuta (1994) は、多くの理論家の研究を整理し、複雑な言語習得の仕組みの中で、とりわけ、言語が人の人との関わりを通して行われる文化的実践である点が重要であると指摘している。

To many theorists, ranging from Mikhail Bakhtin to Jerome Bruner, and from J. L. Austin to William Labov, the interpersonal and cultural displays of language – not the rules of grammar, the dictionary definitions of words, nor the pattern of neural activities – lie at the heart of the matter. (p.161)

英語で人や社会や文化にアクセスするというコミュニケーションの本来の目的を英語教育の中でも忘れないようにするが、「実践的コミュニケーション能力」育成の要諦であろう。そのことによって、ソーシャルスキルも育かれ、教室の中で「実践的コミュニケーション能力」を育成することが可能になり、教室の中で学んだことが教室外のコミュニケーション場面に転移する展望が開けることが期待される。

参考文献

- 文部科学省. 1998. 『中学校学習指導要領』 東京：大蔵省印刷局
- Bialystok, E. & Hakuta, K. 1994. *In Other Words: The Science and Psychology of Second Language Acquisition*. Basic Books.
- Brown, P. & S. C. Levinson. 1987. *Politeness: Some Universals in Language Usage*. CUP.
- Hymes, D. 1972. On Communicative Competence. In J. B. Pride and J. Holmes (Eds.), *Sociolinguistics* (269-93). Harmondsworth: Penguin.
- Thomas, J. 1982. Cross-Cultural Pragmatic Failure. *Applied Linguistics*, Vol. 4, No. 2.
- ポール・ロシター, 鶴田庸子, ティム・クルトン. 1987. 『英語のソーシャルスキル』 東京：大修館書店.